世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number 16

2001年 第1号

Contents

Special Report

難民キャンプ体験記

キャンプ・サダコ2000年

Information

新国連難民高等弁務官就任

「難民」をテーマにした教材集

50th Anniversary UNHCR

国連難民高等弁務官事務所

SPECIAL REPORT

難民キャンプ体験記
2000年夏

緒方貞子・前高等弁務官の名にちなんだ「キャンプ・サダコ」は、UNHCRが毎年実施している青年向けの研修プログラムです。難民援助の現場を実際に体験することにより、難民問題への理解を深め、その体験をもとに難民問題とUNHCRの活動に対する理解と支援を広める人材を育てることを主な目的としています。参加者は約1カ月難民キャンプに滞在し、UNHCRやNGO（非政府組織）の指導のもと活動します。以下は2000年の「キャンプ・サダコ」へ日本から参加した人たちの報告です。

キャンプ・サダコに関する詳しい情報はUNHCRの日本語ホームページ（www.unhcr.or.jp）に掲載されています。

教育委員会設立のきっかけを作った

● 加藤千映子　大学生　21歳
滞在国　エチオピア

エチオピアには欧米や韓国、地元エチオピアからのキャンプ・サダコ参加者が計14名集まり、2〜3人のグループに分かれ、6つのキャンプに派遣されました。私はエチオピア人の22歳の女子学生と一緒に、首都から西へ約720キロ（車で2日間）、スーダン国境から50キロにあるシャコレ難民キャンプへ配属されました。

シャコレ難民キャンプには、スーダンにおける北部（現政府）対南部（反政府勢力）の内戦を逃れた難民約1万5000人が生活をしています。ほとんどが南スーダンの人々ですが、100人程度、北スーダンからの難民もいます。北スーダンでも、政府に反対する政治グループなどに属していると迫害を受けるのだそうです。キャンプの人口の半分以上は17歳未満と、子どもが大きな割合を占めています。

キャンプ内で肌が「白い」のは私だけだったので、それが珍しいのか、少し歩くと子ども達がたくさん後を付いてきてかわいかったです。逆に、私を見て泣き出す赤ちゃんや小さい子もたくさんいました。

難民の人たちは配給で生活をしています。英語が話せる難民の人は、キャンプ内で何らかの仕事をしていますが、ほとんどの人は仕事を持っていません。

食糧の配給はWFP（世界食糧計画）により月2回行われますが、中身は粒のままの小麦、豆、油、塩のみです。これでは味もそっけもない食事しか食べられないので、難民の多くは配給の一部を売って、野菜などを手に入れていました。また、キャンプにある小麦をひくための臼（うす）が壊れていて使えないので、近くの市場でひいてもらうためにも配給された食糧を売っています。

写真提供　加藤千映子

ワークショップの参加者たちと加藤さん（右端）。参加者には社会における男女の役割などを演じてもらった

衣料品、毛布、石鹸など食糧以外の物資の支給はUNHCRの責任ですが、資金不足のため滞っており、難民はそういった物資を買うためにも、配給を売っているそうです。

教育ワークショップ

私はフィリピンに留学した際に「エンパワーメント（自らが置かれている状況に住民が気づき、改善のための行動を起こすことで自分自身に自信をつけていくこと）」を学びました。これは貧困層だけでなく、難民にも大切ではないかと思い、エンパワーメントの第1歩としてワークショップを行い、難民の人々の「気づき」を高める活動を行おうと思っていました。

キャンプには幼稚園と小学校があり、先生も難民です。識字教室もありますが、どちらも女性の退学が多く、現地で活動するNGO（非政府組織）の課題になっています。そこで、ワークショップのテーマを教育に絞って活動を行う事にしました。

ワークショップでは、難民の参加者を男性、女性と女の子、若い男性に分けました。というのはエチオピア同様、スーダンでも男性優位の考

え方が非常に強く、女性は男性の前では黙ってしまうからです。

ワークショップでは、役割を演じる「ロールプレイ（role play）」の手法を使いました。3つのグループに「男性」「女性と女の子」「子ども」「若者」というテーマを与え、それぞれのテーマから連想する行動を演じてもらいました。

するとどのグループでも参加者たちは、男性はお酒を飲んでケンカをしているのに対し、女性は水汲み、掃除、薪割りなどの家事をしているという演技をしてくれました。そのような演技を客観的に見て、難民自身が男性と女性の大きな違いに気づきました。そこで、その違いの原因を話し合ったところ、それは伝統だからとか、女性が教育を受けていないせいでは、という意見がでました。

そこで、今度は教育がどのように大事かを気づくためのロールプレイをしました。それから、教育の現状を話し合い、問題点と解決法を明らかにしました。解決法としては、まず両親が子どもの教育の大切さを認識する、退学した子の家族と話し合う、早婚を防止する、などが挙がりました。

一連のワークショップを経て、難民の人たちは、教育の問題を考える委員会の設立を提案し、他の難民の同意を得て、新しい委員会が設立されました。委員には女性や女生徒も含まれています。UNHCRがこの委員会を支援していく予定です。

ワークショップがこのような結果になるとは全く考えていませんでしたが、難民自身が教育の大切さに気づいた結果、委員会ができたことに非常に大きな意味があると思います。今まで難民の人たちは、UNHCRやNGOに言われて何かをすることはあっても、自分たちで考えた末に何か行動を起こす事はなかったので「この委員会は自分たちのもの」という意識は高いと思います。

UNHCRの職員に「このワークショップを通して、難民の人々には可能性があり、様々な活動にもエンパワーメントの視点を取り入れていくことが大事だと分かった」と言われて、この活動をしてよかったと思いました。また、どんな状況においてもエンパワーメントが大切であると再確認できたことを、これからの活動にも生かしていきたいと思います。

難民支援の管理体制を改善する

● 川本祐一　経営コンサルタント　26歳
滞在国　タンザニア

昨年の7月中旬から約1カ月半にわたって、私はキャンプ・サダコ参加者としてタンザニア西部のキゴマ地方にあるカスルという町に滞在しました。キゴマ地方はブルンジと接しており、またタンガニーカ湖の対岸にはコンゴ民主共和国（旧ザイール）があります。現在内戦が起こっているこれらの国々からキゴマ地方に流れてくる難民のために、UNHCRが難民キャンプを運営しています。

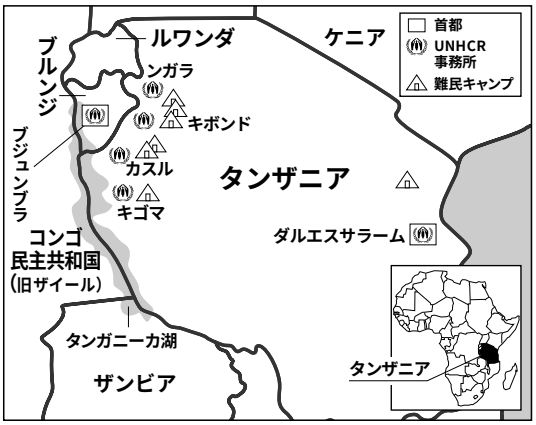
カスルは、人口約3万人の小さな町です。その周辺には3つの難民キャンプがあり、これらをUNHCRのカスル現地事務所が担当しています。このうちふたつはブルンジ難民、残りのひとつがコンゴ民主共和国からの難民向けであり、それぞれのキャンプには5万人程度が生活しています。難民には、家をつくるための土地、基本的な材料（屋根用のビニールシート等）、および生活に必要な食糧等が与えられ、難民は2週間に1度与えられる配給で生活しています。

写真提供　川本祐一

NGOの職員と難民の代表を集めて行ったワークショップ。援助の効率を上げるための相談をする川本さん（右から2人目）

タンザニアにいる難民はキャンプから一定距離以上離れることを許されておらず、また基本的に働くことも許されていません。そのため、難民は他者に依存した生活を余儀なくされており、UNHCRは、キャンプ内の治安を担当する警察官などの教育、難民の保健や教育といった、キャンプの基本的な生活環境を整えるためのさまざまな支援活動を行っています。

これらの支援活動を実際に行っているのは各キャンプを担当しているNGOであり、UNHCRはそれらの



NGOから提出されたレポートと、キャンプの視察を基に、資金提供や助言・指導を行っています。しかしUNHCRの現地事務所に与えられる資源や人員には限りがあるため、多くの活動内容はUNHCRの指導なしで行われているのも現状です。

私は今回の滞在中に、UNHCRによる支援の管理体制の改善を試みました。

キャンプ内における多くの支援活動は、UNHCRを頂点とした管理体制で行われています。通常は、UNHCR担当者の指揮の下にNGOの担当者がおり、その下にNGOの現地スタッフ、NGOの報酬を受けて働く難民スタッフ、キャンプのコミュニティー内の担当者（難民）、という様に作業が分担されていきます。

各レベルの担当者は上のレベルの担当者向けにレポート作成や報告を行う義務があり、それを受けた担当者がさらに上のレベルに報告を行っていきます。その結果、UNHCRの担当者には非常に間接的な情報のみしか入ってきません。

また下のレベルで働く人たちは、達成した成功内容のみを報告するため、活動に必要としたコストや問題点はあまり書かれておらず、多くの問題は上層の担当者には知らされないままとなります。

このような傾向に対し個々の職員の間ではさまざまな改善努力が行われています。各キャンプの担当職員を集めてワークショップを行うことにより、それぞれのキャンプで発生している問題や改善策を、同レベルのスタッフ間で共有するというような試みや、報告書に統計データを加え、形式を整えることによって報告内容をより客観的なものにするといった努力が、一部の熱心な職員により行われています。

私はキャンプ内における難民の就労に対する支援の改善を目指しました。難民は基本的に経済活動を禁止されているものの、生活の足しとなるような小規模の労働はむしろ奨励されています。キャンプ内ではパン屋や肉屋を始めとしたさまざまな食料品店や、床屋や大工などが難民によって営まれています。ですが難民の多くは商売を始めるのに必要な資金や知識を持っていないため、UNHCRがNGOを通して資金を提供したり、経営に関する教育を行っています。

しかし、このような支援を受けた経済活動による難民の収入は非常に限られています。特に多くの女性が行っているかご作りなどは、販売する市場が限られていることなどからほとんど収入になっていないのが現状です。

私は、商売を営んでいる難民や各NGOの担当者に対するインタビュー調査等を行い、NGOの担当者を対象としたワークショップを主催しました。各キャンプで行われている各種の支援活動に関する情報交換や、活動目的の再確認、今後の活動へのアイデアを出し合うことにより、各担当者が支援活動の目的や方向性を共有し、新たなアイデアを吸収することができたと思います。

しかし、キャンプ内の支援活動の効率化を目指したこのような努力は、全体の事業のごく一部であるのも事実です。結果として、担当職員の個人的な能力や「やる気」によってキャンプ内の環境、ひいてはそこに生活する難民の生活が大きく左右されます。

現場の職員の数には限りがあり、決して十分とはいえない状況の中で、一人ひとりの職員の活動は非常に大きな意味を持っています。私の滞在はあまりにも短く、限られた貢献しかできませんでしたが、自分の手の届く範囲でできる、また実行されなければならない仕事は無限にあるということを改めて認識できた経験だったと感じています。

心の傷を癒（いや）し自立をめざす人々

● 上田万里子　薬剤師　34歳
滞在国　ユーゴスラビア連邦

2000年10月5日、ミロシェビッチ政権の崩壊。その日はユーゴスラビアにとって記念すべき日となった。テレビの画面では、あの連邦議事堂前に集まった圧倒的な数の大群衆が、歓喜の声を上げていた。私はまるで自分もその大群衆の波にのまれているかの様に、体中が熱くなっていくのを感じていた。

キャンプ・サダコの研修を終え、9月にセルビアを去る際、このように状況が大展開しようとは予想だにしていなかった。私の出会った人々は、大統領が変わることを心の中で願いつつもそれはかなわぬ夢と思っていた。

滞在中、現地でできた難民である友人に選挙について聞くと彼は自嘲するように笑いながら市民権をとらなければ投票資格がないことを語った。子どものころは自分の国の一部であったこのセルビアにクロアチア

から難民としてやってきて10年近くになる。もとはひとつの国に住む同じ民族でありながら、自分は難民という立場に置かれ国を失った。どこへ行っても「よそ者」であり、難民ということで人よりどこか劣っているように感じずにはいられない、と寂しそうに語った。今も、戻る国もなければこれから自分の国となる場所も見つからない。「難民になるということはつまり、そういうことなんだ」とつぶやく彼の言葉から、人々を身の置き所のない状況へと追い込み、何十万人という難民をあっという間につくる戦争の恐ろしさを改めて感じずにいられなかった。

日本のNGOの活動

ベオグラード到着後、UNHCRの援助計画を実施するパートナーとして、セルビア全域で難民や国内避難民の支援を行っている日本のNGO（非政府組織）、JENに配属された。JENの活動を手伝いながら難民の人々と交流し、彼らの現状を詳しく知ることになった。ベオグラードにホームステイしながら、JENが活動を行っている難民・避難民居住地への訪問に同行し、難民収容施設やJENが運営する20のコミュニティーセンターを訪問することができた。

JENの活動の目的は、人々の自助・自立支援である。具体的には「心理社会的プロジェクト」と呼ばれる、難民生活からくる経済的・精神的ストレスと戦争により深く傷をおった心を癒（いや）すための心のケアを行っている。また経済的自立を目指した収入創出プロジェクトも進めている。

心理社会的プロジェクトの活動の中心となっているのが「コミュニティーセンター」である。ここは心理カウンセリング、セラピーワークショップなどの活動が行われる場であり、また難民が自らの意思によって参加し、彼らの自信、希望、そして信頼関係を取り戻すためのなくてはならない対話の場となっている。

写真提供　上田万里子

ペトロバツの町で子どもたちに「大きな栗の木の下で」を教える上田さん（左奥）。子どもたちは日本語の歌を一生懸命覚えようとしてくれた

私は滞在中、コミュニティーセンターで実施されている子ども向けの活動や編物ワークショップなどに参加した。また、日本の支援者からの寄贈品である毛糸をここに配布するお手伝いもした。

子どもたちのクラスでは、一緒にお絵かきをしたり、腕相撲、福笑いをしたり、日本の歌や踊り、折り紙を教えたり、彼らからお返しに民族舞踊や歌を習ったりして子どもたちと交流を深めた。

子どもたちや現地職員と接すれば、セルビアの人たちは教育程度や生活水準が高く、日本人と変わらない生活をしてきたとすぐわかる。

再会を待ち望んでいてくれた

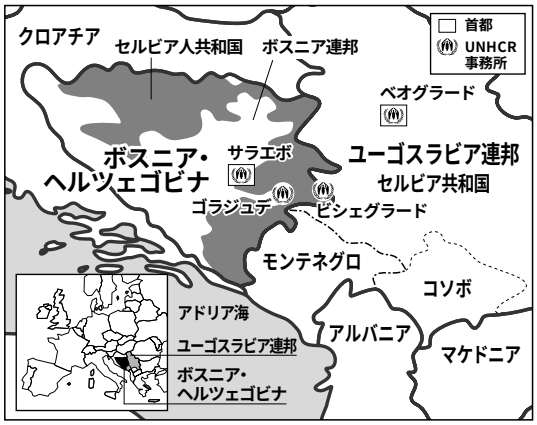
2回目の訪問した先々で、私の最初の訪問が彼らにとってどんなに楽しかったか、再び私が来ることをどんなに待ち望んでいたか、歌を忘れないよういつも歌っていたと聞き、日本語の歌の大合唱が始まった時、私はどれほどに嬉しかったことか。全身で好意と愛情をぶつけてくる子どもたち。私が彼らに与えた以上に、心に響く愛情を彼らから与えられる。その度に、感動でいっぱいになり涙があふれた。

大きな声で歌い踊り、はしゃぐ子どもたちは一見元気で普通の子のように見える。しかし、どの子の笑顔の片隅にも小さな暗い影を垣間見た。

戦争、空爆により人間としての存在価値や尊厳を傷つけられた人々にとって精神的支えがどれ程大きなものになるかを教えられた。その「支え」は家族や友人、JENの職員、そしてUNHCRなど世界から支援してくれる人々のやさしさや理解しようとする心であると。人間の暖かさこそが人々を救うことができる、ということが現地では身にしみる。

民族問題の複雑さ、なぜ人は争いあうのか。国というもののもろさ、危うさ、どうして人間は同じ過ちを犯すのか、など答えは出ないけれども、セルビア滞在中考え続けずにはいられなかった。

キャンプ・サダコのもうひとつの目的である参加者による日本での広報活動について説明すると、人々は私に期待あふれる顔を向けた。今のセルビアの置かれている状況や自分たちの苦しみ・悲しみに他国の人々が目を向けてくれると思うだけで心が安らぐ様子だった。それだけに、現地で出会った全ての人々の思いをひとりでも多くの人に伝えることが今の私の大事な任務であると感じている。



ボスニアの子どもたちと繋(つな)がる私の生徒

●グレン・サービス　小・中学校の英語指導助手　31歳　カナダ国籍
滞在国　ボスニア・ヘルツェゴビナ

写真提供　Glenn Serviss

日本での教え子が作ってくれたカルタで遊ぼうとするサービスさん（中央）。この写真は帰還民の子どもが写してくれた

ボスニアの首都サラエボでUNHCRの活動に関するオリエンテーションを受けると、一刻も早く難民の人々に会いたいと思った。地雷に関する説明は非常によかったが、不安にもなった。

ボスニア東部、ゴラジュデにあるUNHCR事務所には国際職員4人と現地職員6人が働いていた。彼らは私を歓迎し、まるで同僚のように扱ってくれた。

ゴラジュデの夏は優雅で、人々はドリナ川で泳ぎを楽しみ、午後にはコーヒーをすすり、夜には町の橋を渡って散歩を楽しんでいる。ゴラジュデの建物は紛争終結後、大部分が立て直された。私のホームステイした家族の3階建ての家もそのひとつだ。しかし、町を出ると状況は全く違っていた。

ゴラジュデでは、まずUNHCR職員や国連ボランティアと一緒に行動し、ボスニアへ帰還した人々や、避難民の厳しい生活状態や、彼らの持つ希望を写真とビデオで記録する作業をした。紛争で傷ついた家へ戻る人々――中には8年ぶりに家に帰る人もいた――に同行し、彼らがコーヒーカップなど自分の持ち物が廃墟の中で壊れずに残っているのを見つけたときは、感動して泣いてしまった。

再建への決意

難民の人々は、自分たちにも満足な食事がないのに私に食事を分けてくれるほど親切だった。また行く先々でUNHCR職員、平和維持軍、地元の職員、そして難民の、平和なボスニアを再び築き上げるという、勇気と決心がはっきりと感じられ、言葉に表せないほど感動した。ゴラジュデでの滞在中、毎日現場を訪れ、難民や避難民と接触できたのは幸運だった。

ドイツ政府のプロジェクトのため医療に関する資料がボスニア全土で早急に必要とされたとき、医療担当の職員が休暇中だったため、私はゴラジュデ地域の担当者となることができた。通訳の助けをかりて資料を集め、たくさんの質問する仕事は、時間がかかり、ひとつの施設で最低2時間は費やした。この仕事に携わり、紛争の間、「民族浄化」の目的で強制収容所として使われた病院を訪れる機会も得た。

ゴラジュデの隣にあるコパチの町では、民族的に少数派となってしまった人々の帰還のモニタリング（監視）に携わり、紛争の犠牲者の苦悩を記録することとなった。この町は、現在セルビア人共和国に組み込まれており、帰還してくる人々の家は、打ち捨てられていたり、すでに別の家族が住んでいたりする。

だがボスニアで最高の思い出は、明るく、活発な難民の子どもたちと、じゃんけん、カルタ、折り紙そして絵を描いて一緒に過ごした時間だ。子どもたちの遊び道具は私の日本での教え子たちが作ってくれたり寄付してくれたりしたものだ。生徒たちにはどんなに感謝しても、感謝しきれない。

生徒からのまっすぐな反応

日本に帰ってからは、キャンプ・サダコでの経験を広めることに自分のエネルギーを集中している。授業で生徒に難民の苦境を伝える一方、市役所、コミュニティーセンターや学校の体育館などでスライドやビデオを見せることもできた。ボスニアで集めてきたUNHCRのビニールシート（屋根や窓の代わりに使う）、壊れた家の屋根瓦、割れた窓のガラスなども講演での説明に役立っている。

昨年11月には北茨城市の子どもたちによる絵の展示会で、ボスニアの難民・帰還民の子どもたちによる絵を展示できた。多くの人々がボスニアの子どもたちの絵が持つ鋭さを指摘した。絵に悲しみが見てとれる、と書いた人もいた。「子どもらしさと孤独感が同時に表現されている貴重な絵だ」。ある女性はこう書いた。「人々が無関心ではないんだということがわかって嬉しかった」

私の話を聞き、スライド、写真、ビデオを見た後で、多くの生徒は私に手紙をくれた。ある11歳の生徒は次のような言葉で考えを表現した。「私たちはみな同じ人間なのに、世の中にはいまだに家や食べ物がない人々がいます。この人たちは戦争の悲惨な犠牲者です。これから先、私は寄付など、彼らのために何かをしようと思います」

生徒たちは、何度もボスニア難民と帰還民についての話を聞き、友人のように身近に感じるほどになった。だからボスニアの子どもたちに年賀状を書くのも自然なことだった。

私は生徒たちが書いたメッセージに強い印象を受けた。「私はボスニアに行って、あなたとお話をして、あなたの国について知りたい。いつの日かぜひ日本に来てね！」「くじけないで下さい。きっと平和がきます」「あなたの生活、あなたの国、あなたの家族に平和が訪れることを祈っています」「住むところが持てるといいですね」といった実際的なものもあった。

若い間に培われるこの理想――協力と友情――が将来の紛争と難民の発生を予防することに役立って欲しい。

（原文は英語）

Information

新国連難民高等弁務官が就任

UNHCR/O.Vogelsang

第9代の国連難民高等弁務官として、
ルドルフス・ルベルス（Rudolphus Lubbers）氏が2001年1月に就任しました。
ルベルス氏はオランダ前首相で、コフィ・アナン国連事務総長の指名にもとづき、
昨年10月26日国連総会によって次期高等弁務官として承認されました。
1991年から2000年末まで高等弁務官を務めた緒方貞子氏の後任となります。

＊＊＊

ルベルス新高等弁務官は、1939年5月7日オランダのロッテルダム生まれで現在61歳。オランダ・ナイメーヘンのカニシウス大学で学び、1962年、オランダ経済大学（現ロッテルダム大学）を卒業。家族の会社の経営に携わった後、1973年、経済大臣として入閣し、政治家の道を歩み始める。1982年から1994年までオランダの首相を務め、戦後のオランダ首相としては最も長く政権を率いた。

政界引退後は、オランダのティルブルグ大学で「グローバル化」と「持続可能な開発」を講じ、また米国ハーバード大学のジョン・F・ケネディ行政大学院の客員教授として招かれている。さらに、海洋に関する世界独立委員会（Independent World Commission on the Oceans）副議長、ティルブルグ大学の「グローバス（グローバル化と開発研究所）」所長を務めてきた。また1999年11月、世界自然保護基金（WWF）の総裁に選出されている（現在は退任）。

2001年1月3日、スイス・ジュネーブのUNHCR本部に着任したルベルス新高等弁務官は、職員に向けて「世界の難民を援助するため、最小限のお役所主義と、最大限の柔軟性を」と呼びかけ、さらに「世界120カ国で援助活動に携わる5000人のUNHCR職員と共に働きたい。皆さんの協力を望みます」と述べた。

また、緒方貞子前高等弁務官の10年にわたる功績を称え、UNHCRが難民援助によって築きあげた信望を守り続けていかなければならないと語った。UNHCRの財政状況については「難民問題は財政支援を得るに値する」と述べ拠出国への理解を求めた。

また高等弁務官は、世界の難民が個人としてあるいは集団で成し遂げてきた成果は敬意を払うべきものであり、UNHCR設立50周年とは、そのことを世界の人びとに知らせ、理解を得るふしめである、と述べた。

既婚、3人の子どもの父。

学校で「難民」について教えるための教材集が発行されました

新しい開発教育のすすめ方

難民

―未来を感じる総合学習

開発教育研究会編著／古今書院

定価 本体 1800円＋消費税

本書は「難民」をテーマに開発教育研究会によって3年をかけて作られた教材集です。

難民の存在に気づく機会の少ない日本の子どもたちに、難民についてわかりやすく伝えたい、難民問題を通して平和の大切さを学んで欲しい、という願いから生まれました。

本書に記載された教材は、学校の授業にそのまま使用できるよう構成されています。小学生向けから大学・一般向けまでの教材を扱っており、難民問題を授業で取り上げようとする先生方にとっての貴重な手引書です。

書店あるいは「関西セミナーハウス」（Tel 075-711-2115　Fax 075-701-5256）で入手可能です。ご活用下さい。

内容（目次より抜粋）

まえがき
第1章　総合学習は学びの未来形
第2章　実践事例（小学生以上対象）
同じ時代を生きる子どもたち
第3章　実践事例
（中学生・高校生以上対象）
強いられた移動
―地球的課題としての難民―
震災の体験と重ねて
新聞記事を使って考える
難民支援―私にできること―
第4章　実践事例
（社会教育・中学生以上対象）
難民問題の基礎知識
資料　A．難民の国際的保護
B．開発教育と難民問題
C．参考図書
D．関連団体リスト

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌

●「難民 Refugees」 ―― 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来への展望などを紹介します。

ニュースレター

●「UNHCR News」 ―― UNHCRの活動を紹介。UNHCR日本・韓国地域事務所が独自に編集。年3～4回発行。（8ページ）

パンフレット

1「難民女性」 ―― 難民の8割は女性と子どもです。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。

2「紹介用リーフレット」 ―― UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介。

「わたしたちの難民問題」 ― 大学生など若いボランティアが参加して高校生向けに作った入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）

「難民の子どもたち」 ―― どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。小学生から高校生向け。（20ページ）

●数字で見るUNHCRの活動
●UNHCRの概要
―― 世界の難民数や組織の概要をまとめたもの。A4版　各2ページ

1. 絵画ポスター ―― アフガン難民（12歳）とスーダン難民（17歳）、旧ユーゴ難民（9歳）の描いた絵画をポスターにしました。3枚一組。サイズA2（42×59cm）
「あなたの子はこんな絵を描きますか」

2. ポスターセット ―― 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。10枚一組。サイズA2

3. コソボ難民ポスター ― マケドニアに逃れたコソボ難民のキャンプとコソボ国内避難民の写真。2枚一組。サイズA2

募金箱 ―― 難民援助の募金にご協力ください。
●ボール紙製　8.5×18×13cm
●プラスチック製　8.5×18×13cm
※プラスチック製は折りたたみ不可
詳しくはお問い合わせください。
UNHCRへの募金は「日本国連HCR協会」を通じて送られます。詳しくは協会までお問い合わせください（Fax　03-3499-2273）。

お貸しします

展示用パネル ―― 写真パネル、説明パネル、世界難民地図を合わせ約30枚が一組です。（68×47cm 2箱に収納）
※使用希望期間、使用目的、主催者をお知らせください。ご要望が多いため、2カ月前の申し込みが必要です。

ビデオテープ

1 日本語吹替え版・字幕版
● ほんのちょっと変えてみよう（14分）

2 日本語吹替え版
● 世界の難民はどこに1999-2000（15分）
● 難民女性（13分）
● 難民になるって、どういうこと？（15分）小学校高学年以上

3 日本・韓国地域事務所制作
● 難民もみんなも同じ地球人（19分）中学生向き

ホームページ

UNHCR日本・韓国地域事務所はホームページを開設しています。ぜひご活用ください。
http://www.unhcr.or.jp

資料の請求は ――

UNHCR（ユー・エヌ・エイチ・シー・アール）
日本・韓国 地域事務所 広報室
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-53-70
国連大学ビル6階
FAX03-3499-2273

資料や募金箱は無料です。ただし送料とコピー代（在庫切れの場合）がかかります。資料の申し込み、質問等は広報室宛てに官製はがきまたはファクスでお願いします。送料（宅急便または郵便小包）は着払いでお願いしていますが、ご無理な場合は資料受け取り後、送料分の切手を同封のアンケート用紙と共に広報室宛てに返送して下さい。

UNHCRニュース No.16
2001年2月
●発行
UNHCR日本・韓国地域事務所
広報室
●郵便振替
口座番号　00140-6-569575
加入者名　HCR協会

表紙写真

右上　修復された自宅の戸口に立ち「何も問題はないよ」と答えた帰還民。これは彼女にとってもUNHCRの職員にとっても良いニュース。ボスニア・ヘルツェゴビナ
Glenn Serviss

右下　日向で乾かされるボスニア式コーヒーカップとUNHCRの援助したカップ。ボスニア・ヘルツェゴビナ
Glenn Serviss

左上　かごの作り方を習うミャンマーへの帰還民。夫を失い家長となった女性が、多少の収入でも得られるようにとUNHCRが行う技術訓練のひとつ
UNHCR/A.Hollmann

左下　1999年頃、ケニアにあるカクマキャンプにはスーダン難民を始めとして8カ国からの難民約7万5000人が暮らしていた
UNHCR/B.Press